

しあわせのまち若葉

第29号

令和7年7月発行

【編集】

若葉区支え合いのまち推進協議会事務局

若葉区貝塚2-19-1

(若葉保健福祉センター内)

TEL 043-233-8558

FAX 043-233-8251

令和6年度「若葉区支え合いのまち推進協議会」講演会を開催!! ～計画リスタートにあたり、地域課題解決のカギは!?～

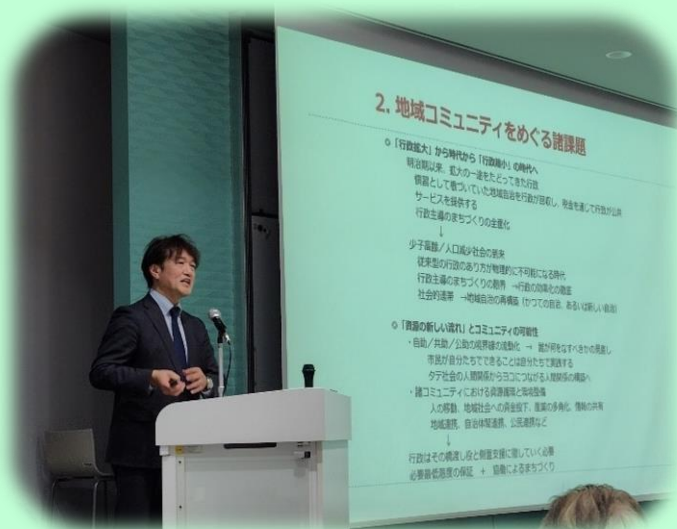
新型コロナウイルス感染拡大の影響により、地域活動が一時的に制限されていたことから、令和5年度に若葉区支え合いのまち推進計画の中間見直しを行い、令和6年度から新たなスタート『Restart』を切ることとなりました。

この計画の再始動にあたり、若葉区支え合いのまち推進協議会の活動を広く周知するとともに、地域課題を共有し、その解決の“カギ”となる地域内の多様な連携について考える機会として、講演会を開催しました。



この講演会は、植草学園大学協力のもと、令和7年2月20日に同大学さくらホールで行われ、町内自治会、民生委員・児童委員、地域活動の実践者や相談支援機関の支援者など、約90名が参加し、先生や発表者の話に熱心に耳を傾けていました。

第1部では、「地域コミュニティの再生に何が必要か」をテーマに、千葉大学大学院社会科学研究院教授で、「政治思想史」や「市民参加・協働によるまちづくり」といった社会実践に関するテーマにも取り組んでいる関谷昇先生より基調講演がありました。



＜関谷 昇 教授＞

「地域づくりにおいては、組織の存続が目的化しないよう、本来の目的を問い直す必要がある。縦割りでは限界があるため、世代や分野を超えて“あいだ”を繋ぐ視点が重要。一人ひとりの生き方を尊重し、住民の声を引き出す姿勢が地域福祉の鍵となる。若者のローカル志向をうまく取り込むためには、多様な入り口が必要。共通の土俵で対話し、補完し合う連携が持続可能な地域を育てる。」など、世代や立場を超えて“つながる”ことの重要性を強調されました。



＜会場から大きな拍手が！＞

第2部では、事例紹介として、仕事で保護者の帰宅が遅いなど、ひとりで過ごす子どもたちのために、地域の大人たちが運営する居場所「ほぼ毎月駄菓子屋」について千田氏より、また、主に高齢者の外出（買物など）支援を、行政・住民・地元企業が連携し、運行するグリーンスローモビリティ「さくらまる」の事例について東田氏より、それぞれ発表がありました。



千田氏からは、「継続のためには、『目的や目標』を伝え続けることが重要である。人は人ではなく『ミッション』に共感して集まる。また、無理のない範囲で取り組み、『毎日』『絶対』といった負担を求めず、具体的な形で協力をお願いする姿勢が大切である。」など、活動が無理なく持続させるためには、共感を育みながら関わりやすい工夫を重ねることが大切だと強調されました。



＜千田 理子氏＞

続いて、東田氏からは、「地域活動が活発で住民同士のつながりが強いという地域の特性を生かし、さまざまな団体と連携しながら、募集チラシをわかりやすく工夫するなどして、運転ボランティアスタッフを確保している。今後は、企業に定期運行の一角を担当してもらうことも視野に入れながら、活動を継続していきたい。」など、地域の力と外部資源を組み合わせた持続可能な仕組みづくりへの意欲が示されました。

参加者からは、「講演を通じて地域の現状や“つながり”の重要性を改めて実感し、地域活動への意欲が高まった」との声が聞かれました。また、関谷先生の講演や事例紹介について「非常に有意義だった」との評価があり、特に「できる人が、できるときに、できることをする」という考え方に共感が集まりました。

一方で、「これまで既存の枠組みに合わせて生きてきた自分にとって、その枠を外して新しい組織をつくるのは大きな挑戦」といった本音も聞かれ、地域づくりにおける葛藤や課題も改めて浮き彫りとなりました。

こうした参加者の声が示すように、本講演会は、地域の“つながり”の力と、無理なく続けられる活動のヒントが詰まった、学びと気づきの多い時間となりました。



＜東田 日出夫氏＞

「若葉区支え合いのまち推進計画」でお互いさまのまちづくりを！

「だれもが いきいきと暮らせる しあわせのまち 若葉区」



～あなたとわたしでつくる 支え合う地域福祉の実現をめざして～



この基本目標は、若葉区の目指すべき将来像です。住民の皆様をはじめ、地区部会、町内自治会、福祉施設、学校、諸団体等の連携、協力が本計画の推進には必要です。

「困ったときはお互いさま」の支え合いの仕組みづくり。

あなたのまちでもすすめてみませんか。

